

# 一心寺かわら版

第四十五号 平成三十一年一月発行

ホームページ・ブログ・フェイスブックは「持名山一心寺」で検索

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

旧年中は護持運営にご協力いただき

まして誠に有難うございました。

本年もよろしくお願ひ申し上げます。

南無阿弥陀仏

## 秋季永代経 報告

台風の接近が危惧されましたが、汗ばむほどの好天に恵まれての法要。納骨堂で「讚仏偈」、本堂で「阿弥陀経」、「正信偈」をお勤め。法話は赤松円心師（東かがわ市・正行寺）。

仏さまの教えを聞くのに大切なこと。一つには「初事として聞くこと」、二つには「我一人の為として聞くこと」、三つには「今生最後と聞くこと」。特に私のこととして聞くことが難しい。法話を聞いて耳が痛いと思っても、私のことではなくて「これは家に帰って〇〇に聞かせたい」と思うのが私。そんな私を必ず救うと呼びかけてくださっているのが阿弥陀さま。最後に、その阿弥陀さまの心を節談（説教に抑揚、節をつけて情念に訴えるように説く）を交えてお取り次ぎくださいました。



## 不登校は不幸じゃない 報告

二〇一八年八月十九日に開催された全国一斉百力所開催「不登校は不幸じゃない」。発起人の小幡和輝さんは、約十年間の不登校を経験。その後、定時制高校に入学し、高校三年で起業。様々なプロジェクトを立ち上げています。

このイベント開催にあたって「不登校になった先に居場所があるかどうか。それがとても大切だということ。九月一日夏休み明け。子供の自殺が多くなる。そんなバカなことがあってたまるか。不登校を肯定するムーブメントを作ります」。

「僕の原体験は誰かの参考にはなるかもしれないが、すべての当事者に当てはまるわけではない。一概に不登校といっても、その理由は千差万別。誰かの人生を他の人の人生にそのまま当てはめることはできないでしょう。でも、参考にはなるはず」と思いを綴っています。

「不登校だったけど今しあわせに生きている人と、不登校だったことで今ちよっと大変な人とがいる。その二つは何が違ったのか」。小幡さんは学校の役割は二つあると言います。「それは「学ぶこと」と「友達、コミュニティを作ること」。不登校でもその二つを代用できれば問題ない。振り返ってみれば僕にはそれがあった。今ならネットで勉強することも、SNSなどでコミュニケーションを取ることもできる。どこかで「学び」と「コミュニティ」ができなれば不登校はちよっと大変。学校に行けば、それを与えてくれるから楽。不登校は決して楽な道じゃない。自分で学ぶにはお金

も手間もかかる。だから勧めるということとはしないけれども、不登校にも可能性は広がっている。世界は広い。そういう選択肢もあるということを知ってほしい」とのこと。

一心寺会場の主催者松本貴大氏（下写真）は「学校で勉強すればするほど、できる人間しか幸せにならないんじゃないだろうか。僕は、いくら勉強しても努力しても、それは明るい未来に繋がらないんじゃないか、学校なんて意味ないんじゃないか」と感じたことが不登校のきっかけだったそうです。



不登校に苦しむ子どもたちとどのように接したら良いのか。「こちらから声を掛けて何か提案する。相手からの返答は否定しない。それを受け入れてまた提案する。その繰り返しが大切」

「不登校の話題ではなく、それ以外の、相手が好きな話題を何気なく話す。信頼できる相手と認めてもらえなければ心は開かないから、無理して核心に触れない」

「不登校になっていても、プライドがある。だから親や身近な人にはなかなか話せない。それを踏まえて対応しなければならぬ」

「振り返ってみれば、不登校に悩んでいた時期でも、だれかとながっていた。好きなゲームをする仲間であったり。悩みを打ち明けることができれば、孤独が解消されてもつと楽になっていただろう。それができなくても、そういう存在がいたことによって何とか

自分を保つことができたように思う」

小幡さんもおっしゃっていたキーワード「コミュニティ」、どこかと誰かとながっているかどうかが大切だと実感します。

不登校の子供を持つ親御さんの声。

「学校に行くことはその子の未来の選択肢を広げるため。だから親としては何としても行かせたい」

「社会に出たらもっと大きなストレスがあるだろう。学校はそれに耐性をつける役割があると思う。学校に耐えることができないければこの先もっと大変ではないか」

子供にとっては、未来を考えるよりも今の苦しみが大きいのでしよう。それをどう受け止めていけば良いのでしょうか。

「不登校児の親になってみて、自分の苦しみ以上に、子供が悩んでいることが苦しい。自身を振り返ってみて、自分の親に申し訳ないという気持ち」

その気持ちが子供に伝わるだけで解決するような気がします。ただ、それが難しいのでしょうか。

時間が経つにつれて、最初は固かった参加者の顔が明るくなっていったような気がしました。問題が解決したわけではありません。しかし、同じ思いを抱えている者同士で話をするだけでも心強くなったり、気が軽くなったりするのではないのでしょうか。

このような悩みの相談に乗ることも、お寺の住職の仕事の一つでしょう。ただ、私にはそれほど力量はありません。しかし、その思いを抱えた人たち同士が寄り添う場を作る、また、必要に応じて専門家につなぐという役割はできます。これからも様々なことを学びつつ、活動の幅を広げて、みなさまのお役に立てるお寺になればと願います。

## 万灯会報告

八月二十五日、初開催の万灯会。「よるしるべ」でも好評を博した「EIEREIER oh」の竹灯り。春の桜、夏の花火、秋の銀杏、冬の雪の結晶と四季折々の光景を光で美しく表現してくれました。

蓮が浮き出る美しいオリジナル竹灯籠（下写真）。南無阿弥陀仏と有縁の方々の法名、お名前を筆書きしてお供え。みなさま、色々な思いを馳せて手を合わせられたことでしょう。集まった浄財は西日本豪雨災害、広島県御調町への義援金とさせていただきます。



## オウム真理教を考える―死刑執行を受けて



昨年十月までの一年間で、最も新聞が読まれたのは七月七日であったとのこと。その日の記事には西日本豪雨災害とともに、松本智津夫死刑囚（上写真）らオウム真理教の元幹部らの死刑が執行されたことが大きく取り上げられていました。一般の人からは「事件がやっ」と解決するのかもしれない」との声がある一方、被害者家族からは「もう真相に迫れない」と悔しさ

を露わにする発言がありました。警察公安当局は「教祖の神格化や後継団体などでの主導権争いの原因につながる恐れがあることから遺体の扱いに関心を寄せている」。平成も終わりを迎えようとする今、もう一度、オウム事件について考えてみたいと思います。

国民に大きなショックを与えた事実の一つに、オウム幹部の多くが高レベルの教育を受けていたことがあります。エリートと呼ばれるような若者たちがなぜオウムにひかれ、大量殺人に加わったのか。事件を生み出した国や社会の病理は解明されていません。オウムのドキュメンタリー映画を撮った森達也氏は「麻原を信奉することがなぜ危険なのか誰も説明できない。麻原を解明できていないから。彼の何が危険なのか、彼は何をもってあのような指示をしたのか、動機を語れる人がいるのに、それをちゃんと聞かないというのは、司法国家としてはあってはならないことだ。動機の究明はもう無理となった」とおっしゃいます。そして、オウムが狂気に走ったのは「教団が潰されるのではないか」という麻原の危機意識と、殺すことが救うことと通じてしまう宗教の論理。そして麻原が喜ぶであろう言動をしようとした弟子と、弟子が期待するであろうとふるまった麻原との「相互忖度」と解釈されています。

脱会者支援に取り組んだ滝本太郎弁護士の「信者には「麻原彰晃」という人はもともと存在しなかったんだ」と伝えたい」との言葉が心に残っています。麻原という存在は、嘘で塗り固めて作り上げられたものであって、弟子が見たであろう尊師は存在しなかったのだということでしょう。

ヨガサークルだったオウムが大きくなったのは、空中浮揚と称する写真が雑誌に取り上げられたのがきっかけだったと言います。落ちついて考えればトリックだと気付きそうなものですが、多く

の人が本気にして麻原を特別な存在にしてみました。これは、現在問題となっている「フェイクニュース」に通ずるものがあると思います。情報が氾濫している現代、嘘に振り回されないように、より一層気を付けなければなりません。

アレフ脱会を支援する真宗大谷派・瓜生崇氏は、多くの若者たちが麻原に惹かれていったのは「人間には真実のために生きたいという強い欲求があり、麻原の教えにはそれを実現するための明確な目標設定があるからだ」とおっしゃいます。「一生懸命、人生を生き抜いても人生の深い部分の悩みは解決しない。人間はそうやって迷って流転を繰り返してきた、という問題提起は伝統仏教と同じです。それを解決するためにはグルの前で修業し、様々な体験をするという「教行証」が明確に説かれています。：「なぜ人間は生きて死ぬのか」そうした問題の解決を求めている人がたくさんいて驚きました。それはオウムや後継団体のアレフも同じだと思います。：みんな迷わないための答えが欲しくてしょうがない。しかし、そのような答えを得ても人生は思い通りに行かない。：人生への深い苦悩を抱えた多くの人は、空っぽになった自分を何とか埋めないと生きていけない。そして、明快な目標や解決策を提示するアレフなどにひかれていく」とおっしゃいます。

そして、脱会者の中から「真実に生きる高揚感がなくなってしまい、一体どうしたらよいのかわからない」という言葉が聞かれ、それに応える力がないと思いきらされるそうです。

私たち伝統仏教教団に属するものが、お釈迦さまの教えを確かに伝えることができているのか、反省させられます。お釈迦さまの考え方、世界観がもっと広く理解されていけば、オウム事件は起こらなかったかもしれません。

私は仏教を専門に学んだわけですが、「それまでの人間関係を断絶させるもの」、「生活に支障があるほどの財産を要求するもの」、「こうしなければ悪いことが起こると脅すもの」は信ずるに値しないと教えられました。

未熟な身で大きなことは言えませんが、仏教は世界に素晴らしい価値観を寄与できるものであると思いますし、そのようになることを願います。

### よるしるべ&よるしらべ

恒例となった「よるしるべ」。今回も榎黄州氏の陶の灯りと梶高慎輔氏の映像作品によって参道が幻想的に彩られました（下写真）。

「よるしらべ」はパーリ語での三帰依文、輪唱形式の対揚と、新たな趣向を取り入れたプログラム。暗いお堂の中で輝く金色の炎の中、美しい声明雅楽の音色が響き渡りました。

（下写真）

### お知らせ

この度、本山興正寺より北海道の寺院への布教依頼を受けました。期間は三月二十〜二十五日、六カ寺を回ります。その間、留守にすることに なり、みなさまにはご不便をおかけしますが、ご理解ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

